

## 日本人とついで地球人をついで

●宮本亜門

一 九歳ではじめて演出をした。オフ・ブロードウェイのようなスタイルが話題となり、私は新しいタイプの演出家と呼ばれるようになった。それから数年後、「違いがわかる男」として演出家を生業としていたとき、ロンドンのパブで観劇の帰り、友人とビールで乾杯していたら、隣にいたイギリスの若者が絡んできた。

彼は突然、中国人なのかと聞く。私は日本人だと答えると、「日本人は中国の隣人だろ。今、天安門で何が起きているかわらないで飲んでいるのか」とつつかかっていた。もちろん学生たちが広場を占領しているのは知っていたし、関心もあった。しかしその夜、戦車が天安門広場に突入していたとは知らなかった。すぐに家に帰り、テレビの画面から流れる情景を見ながら、日本は中国の隣国であり、暗闇のなか、隣人たちの流血騒ぎが起きているという事実を刻んだ。わかっていると思っていたのに、いつの間にか私にとつての隣人はニューヨークであり、イギリス人になっていた。世界中で演出をと、若いとき

から飛び回って勉強し、ブロードウェイやウエストエンドの劇場街のことは熟知していたが、もっとも近いアジアのこと、沖縄のことさえまったく知らなかった、というか興味が湧かなかったのだ。それから私は、アジアのミュージカルと題して、天安門事件を題材に舞台を作った。それはあまりに無知な自分への戒めでもあった。作曲をお願いしたのがシンガポール人のディック・リー氏。彼と打ち合わせをするためにシンガポールに行ったとき、「重門は、日本軍がここで何をしていたか知っているの？ お互い国を越えて創作する以上、歴史を知っておいてほしいんだ」と言われた。

昨年ブロードウェイで『太平洋序曲』を上演した際も、アジアアメリカンの俳優たちと仕事をして感じた。彼らもアジアとアメリカの狭間に生き、それぞれ異なる歴史のなかで自分たちのアイデンティティを探しているのだ。私にも日本で生まれた理由があるはずだ、バスポートひとつで世界を知ることができる。世界には人の数だけ生き方があり、人の数だけ文化がある。

個を尊重し、地球がひとつであることを私は今、日本人として、そして地球人として体験させてもらっている。



イラストレーション：栗岡奈美恵

みやもと あもん／1958年生まれ。演出家。オリジナルミュージカル『アイ・ガット・マーマン』で文化庁芸術祭賞を受賞。オンブロードウェイにて上演の『太平洋序曲』はトニー賞4部門にノミネートされる。ミュージカルのみならず、ストレートプレイ、オペラ等を手がけ、また空間演出、講演などを通して活躍の場を広げている。http://www.puerta-ds.com/amon/